

序 文

ゲノム解読をはじめとした数々の研究の成果、またエビデンスの集積に伴い、この10年間で医学は大きく進歩している。今後の医学と医療の礎となるような確かな情報は、そのニーズに応じて一層注目を浴び、より重要性を増している。

そこで『カラー版 内科学』においては、ゲノム研究やサイエンスの最新知見を活かした、「21世紀のまったく新しい内科学書」をめざしたいと考えた。

編集においては、このような本書の趣旨をふまえ、第一に、最先端でハイレベルなところにまで踏み込んだ、アカデミックな内容、第二に、疾患の概念から診断・治療まで、病態生理や薬理作用のメカニズムも重視した、深い理解を助ける記述、第三に、オールカラーの図表をふんだんに盛り込んだ、印象に残るビジュアルなレイアウト、に努めた。

構成としては、内科学の総論部分に十分な紙数を割り、その後、内科疾患別の各論をバランスよく配置した。1～12章の総論部分では、1章に内科学の進歩と医の原点として泰斗の先生方に執筆をお願いし、医学全体の歩みやサイエンスの進歩をふまえたうえで、EBMと診療ガイドライン、医師-患者関係から医療倫理、リスクマネジメントに至るまで内科学を幅広い視点から論じていただいた。2章からは、内科診療の進め方や内科疾患の疫学・遺伝学・薬理学から、加齢・環境要因、再生医学に至る内科学の基盤となるサイエンスをわかりやすくしっかり解説いただいた。13～25章までの疾患別の各論部分では、アップデートで深い理解を重視したが、疾患の項目や知識の範囲については医師国家試験の出題基準に準拠した。また、それぞれの疾患にあてる紙数についても、近年の生活習慣の変化、超高齢化に伴う疾病構造の変化に対応し、その疾患の患者数や重要度を十分反映させたものとした。

本書の読者対象としては、医学生、初期・後期研修医、内科認定医や内科専門医をめざす若手医師としたが、内科診療にかかわるすべての医師に、内科学の教科書として日々の診療の場で座右に置きご活用いただきたい。本書の編集は、東大の臓器別・疾患別の全内科の教授が編集にあたり、繰り返し討議を重ね、構想を練って、項目の選定と、その項目の執筆に最もふさわしい全国の大学・基幹病院の第一線の専門医に依頼を行った。

本書の刊行後の最新知見は「増補版」および「改訂版」でタイムリーにアップデートしていきたい。また本書が長い間にわたって最新の内科学のスタンダードな教科書として活用されることを望みたい。

門脇 孝 永井良三